

鹿児島県鹿児島市方言の若年層におけるアクセント変化

言語学・応用言語学専門分野

2021（令和3）年度入学

堀ノ内佑香

2025（令和7）年1月提出

要旨

本論文の目的は、鹿児島県鹿児島市方言の若年層における名詞アクセントを、高年層との比較や東京方言（標準語）との比較をしながら記述し、変化の様相をまとめることである。鹿児島市方言は独自の二型アクセント体系を持つが、世代によるアクセント差が甚だしい。2024年時点での変化の実態を把握し記述するため、窪薙（2021）が2003年に実施した初期調査に基づいて高年層と若年層を対象に調査を実施した。結果、高年層は二型アクセント体系を保持している一方、若年層では伝統的な型とは異なるアクセント型が多数見られた。アクセント型のパターンを細分したうえで若年層に再度調査を行ったところ、標準語アクセントを用いる頻度が高いことが判明した。これは、窪薙（2021）が予測していた以上に標準語アクセントの影響を受けて鹿児島市方言のアクセント体系が変化していることを意味する。

目次

1.	はじめに	1
2.	対象とする言語	1
2.1	鹿児島市方言について	1
2.2	鹿児島市方言のアクセント体系	2
2.3	東京方言のアクセント体系.....	3
3.	先行研究	3
3.1	アクセント体系の変化に関する既存の説.....	3
3.2	既存の説の問題点	5
4.	論点	6
5.	本調査①.....	7
5.1	調査概要.....	7
5.2	調査票.....	7
5.3	調査結果.....	8
5.3.1	高年層	8
5.3.2	若年層	9
5.4	考察	10
6.	本調査②.....	10
6.1	調査概要.....	10
6.2	調査票.....	10
6.3	調査結果.....	11
6.4	考察	12
7.	仮説の検証	13
8.	おわりに	15
	参考文献	17
	付録.....	18

1. はじめに

本研究の目的は、鹿児島県鹿児島市方言の若年層における名詞アクセントを、高年層との比較や東京方言（標準語）との比較をしながら記述し、変化の様相を明らかにすることである。窪薙（2021）が2003年に実施した初期調査に基づいた調査と、アクセント変化の実態をより詳細に掘ることを目的に行った調査の2つを踏まえて、窪薙（2021）の説と筆者が立てた仮説を検証する。

本論文の構成は以下の通りである。2章で対象とする言語の鹿児島市方言の概要とアクセント体系、比較対象の東京方言のアクセント体系について示す。3章で先行研究における既存の説とその問題点を提示し、以上を踏まえて4章で論点を明示する。5章と6章で筆者が行った2つの調査の概要と結果、考察を記述する。これらを踏まえて7章で仮説の検証を行い、8章で結論と今後の課題を述べる。

2. 対象とする言語

2.1 鹿児島市方言について

本研究が対象とするのは鹿児島県鹿児島市方言である。鹿児島市は鹿児島県の中部に位置する県庁所在地で、推計人口は令和6年12月1日時点での582,998人¹となっている。

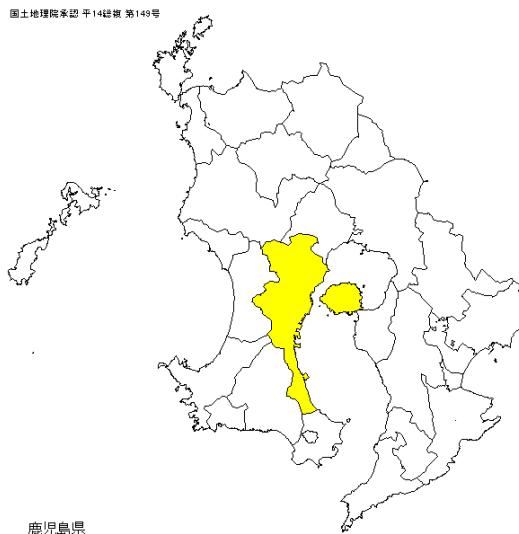


図1. 鹿児島県鹿児島市の地図（ハイライト部分）

[KenMap Ver 9.3 を用いて筆者作成]

¹ 「鹿児島市ホームページ」

<https://www.city.kagoshima.lg.jp/shimin/shiminbunka/shimin/suikeijinko/documents/r0612suikeijinkou.pdf> (最終アクセス: 2025年1月1日)

平山（1997）によると、鹿児島県の方言はトカラ列島と奄美大島の間を境として、南九州方言と奄美方言とに二分される。南九州方言は、甑島・屋久島・種子島・トカラ列島などの離島方言とそれ以外の鹿児島県本土の広い地域の薩隅方言とに分けられる。鹿児島市方言は南九州方言にあたり、方言区画は薩隅方言となっている。

2.2 鹿児島市方言のアクセント体系

鹿児島市方言は、音節で距離・長さを測り音節でアクセントを担う言語であり、シラビーム方言と呼ばれる（窪菌 2021）。Uwano (1999) が作成したアクセント体系の類型のうち、「二型アクセント体系」に分類される（図 2）。

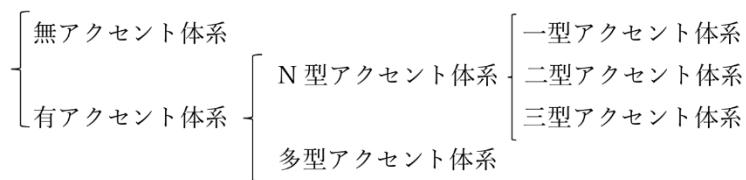


図 2. Uwano (1999) の日本語アクセント体系分類 [Uwano 1999: 152]

鹿児島市方言では語末から 2 つ目の音節が高い A 型と最終音節が高い B 型の 2 種類が観察され（平山 1951）、語がどれほど長くなってもこの 2 つのアクセント型しか現れない。以下、○を 1 つの音節として、ピッチの上昇位置を開き括弧 () 、下降位置を閉じ括弧 () で示す。

A 型 = ○]、[○]○、○[○]○、○○[○]○ ……

B 型 = [○、○[○、○○[○、○○○[○ ……

窪菌（2021）によると、鹿児島市方言では文節を領域としてアクセントが付与される。A 型の名詞に助詞が付くと文節全体が A 型となり、最後から 2 音節目が高く発音される。同様に、B 型の名詞に助詞が付くと文節全体が B 型となり、最終音節が高く発音される。

(1) a. A 型

サ[カ]ナ、サカ[ナ]ガ、サカナ[カ]ラ、サカナカ[ラ]モ（魚）

b. B 型

イノ[チ、イノチ[ガ、イノチカ[ラ、イノチカラ[モ（命）

ココ[ロ、ココロ[ガ、ココロカ[ラ、ココロカラ[モ（心）

[窪菌 2021: 16]

木部・橋本（2003）によると、外来語アクセントの 95% が A 型、残り 5% が B 型をとる。

中・高年層においては、使い慣れない言葉を発音するときの基本アクセント型は A 型であるとされている。また世代が下がるにつれて B 型での発音が多くなるといい、それは「東京の平板型の影響があるからだと考えざるを得ない」(木部・橋本 2003: 97) という。

2.3 東京方言のアクセント体系

一方、東京方言は、モーラで距離・長さを測り音節でアクセント(核)を担う言語であり、モーラ方言と呼ばれる(窪薙 2021)。Uwano (1999) の類型の中では「多型アクセント体系」にあたる(図 2)。モーラ数が増えて語が長くなるほどアクセントの型が増えていく体系であり、東京方言では n 音節の長さの名詞に n+1 個のアクセント型が認められる。松森・新田・木部・中井 (2012) や窪薙 (2021) では、その中でも下がり目があるものを起伏式、下がり目がないものを平板式としている。なお、本研究では窪薙 (2021) に従い東京方言を標準語として扱う。

n=3 の場合

起伏式 = [○]〇〇 (頭高型)、〇[○]〇 (中高型)、〇[〇〇] (尾高型)

平板式 = ○[〇〇]

窪薙 (2021) によると東京方言のアクセントは語を領域として実現し、名詞の後ろに助詞が付いて文節を作っても際立ちの位置は変わらない。

- (2) [イ]ノチ、[イ]ノチガ、[イ]ノチカラ、[イ]ノチカラモ (命)
コ[コ]ロ、コ[コ]ロガ、コ[コ]ロカラ、コ[コ]ロカラモ (心) [窪薙 2021: 15]

外来語のアクセントに関しては 90%が起伏式で 10%が平板式とされ(窪薙 2006)、語末から 3 モーラ目を含む音節にアクセントを置くという規則がある(McCawley 1978)。他にも、古くから日本語に入っており、日常生活において頻繁に用いられる語は平板型になりやすく、新しく取り入れられた語のうち外国語という意識が強くはたらく語は、原語のアクセントやそれに近いアクセントが使われることがある(李 1992)など、様々な分析がなされている。

3. 先行研究

3.1 アクセント体系の変化に関する既存の説

窪薙 (2021) は、若年層において鹿児島市方言のアクセント体系が保持されたまま東京方言の発音を模倣したアクセント変化が生じているとしている。例えば、鹿児島市方言では

A型に属し、東京方言では平板式にあたる語彙のアクセントが若年層においてB型へ変化している（（）内は東京方言のアクセントを表す）。

(3) A型→B型

- カ[エ]デ→カエ[デ]（カ[エデ、楓]
ラ[ク]ダ→ラク[ダ]（ラ[クダ]
オ[ショ]ク→オショ[ク]（オ[ショク、汚職]
ブラ[ジ]ル→ブラジ[ル]（ブ[ラジル）

[窪薙 2021: 178]

逆に、鹿児島市方言ではB型に属し、東京方言では起伏式にあたる語彙ではB型からA型への変化が著しい。

(4) B型→A型

- モミ[ジ→モ[ミ]ジ（[モ]ミジ、紅葉）
キヨー[ト→[キヨー]ト（[キヨ]ート、京都）
ショー[タイ→[ショー]タイ（[ショ]ータイ、招待）
ドーナ[ツ→ドー[ナ]ツ（[ド]ーナツ）

[窪薙 2021: 178]

そして変化がこのまま進むと、「東京方言において起伏式（下降型）で発音される語はA型（下降型）で、平板式（非下降型）で発音される語はB型（非下降型）で発音する」（窪薙 2021: 221）ようになると予測している。この体系は、二型アクセント体系である点や音節でアクセントの位置を測るという点では伝統的な体系を保持しているが、語ごとのアクセント型の選択に関して東京方言に完全に依存する仕組みになっている。

窪薙（2021）は初期調査として、2003年に鹿児島県北西部の薩摩川内市高江町で、基本名詞（複合していない単純な名詞）とその名詞から始まる複合名詞および句表現のアクセント調査を実施した。本研究では基本名詞のみに着目する。インフォーマントは調査当時13~14歳の若年層話者20名、40~55歳の中年層話者10名、60歳以上の高年層話者10名である。調査票では計73語が用いられ、その内訳はA型に属し、かつ東京方言で起伏式となる語（例：赤）14語、A型かつ東京方言で平板式となる語（例：友達）24語、B型かつ東京方言で起伏式となる語（例：青）20語、B型かつ東京方言で平板式となる語（例：ねずみ）15語となっている。A型起伏式語を例とすると、A型を「正答」、B型、東京方言での該当アクセント、上記いずれでもない型で回答した場合を「誤答」²として、インフォーマントごとの誤答率（（誤答/正答+誤答）×100）を算出した。各年齢層での話者全員の平

² 窪薙（2021）ではA型・B型のうち伝統的な型で発音されていない場合を「誤答」としていたが、本来適切な表現とは言えない。本論文では「誤答」として引用する。

均値を表1に示す。

表1. 年齢層別の誤答率(%) [窪薙 2021: 176をもとに作成]

	基本名詞の誤答率
高年層	3
中年層	7
若年層	21

特に若年層においてA型・B型の区別に関する「誤答」が目立つ。窪薙(2021)によると、「誤答」のほとんどはA型とB型の混同であり、従来の体系内で個別語彙のアクセントが変化しているという。このことを踏まえて若年層のアクセント型ごとの誤答率を算出すると以下のようになった(表2)。

表2. 若年層の誤答率(%) [窪薙 2021: 177]

	起伏式	平板式
A型	7	43
B型	25	11

A型平板式語とB型起伏式語でアクセントの変化が大きいことから、東京方言と鹿児島市方言でアクセントの下降の有無が一致していない語彙にアクセント型の混同が顕著であると指摘されている。

窪薙(2021)は調査結果から、東京方言の影響による変化が(i)外来語だけでなく和語や漢語でも、また単純語だけでなく複合語も見られること、(ii)A型のB型化に加えB型のA型化も生じていること、(iii)鹿児島市内だけでなく薩摩川内市のような周辺地域でも起こっていることが明らかになったとしている。

3.2 既存の説の問題点

窪薙(2021)の調査で見られたアクセント変化のほとんどは、A型語をB型で、B型語をA型で発音するという混同であったという。アクセントの変化が大きいA型平板式語とB型起伏式語は「誤答」する可能性が同程度あるにも関わらず、前者の誤答率がより高くなっている点は自明なことではない。この傾向が顕著になると、二型アクセント体系からB型のみの一型アクセント体系に変化する可能性もある。なぜA型語をB型で発音しやすいのか、説明が必要である。

さらに、窪薙(2021)の仮説は、現在の鹿児島市方言話者の実態に照らすと妥当ではない可能性もある。この初期調査は今から20年以上前に実施されたものである。当時の若年層(現在の40代以上)に比べ、現在の若年層はA型語をB型で、B型語をA型で発音する

という「誤答」よりもむしろ、二型の区別が消失し、東京式のアクセントに移行していることも考えられる。このことは筆者の内省と周囲の同年代の状況から容易に推察される。すなわち、窪薙（2021）が想定する東京方言の影響を、A型・B型の区別に影響するレベルの「間接的な影響」とすれば、現在の若年層に見られる影響は、鹿児島市方言のアクセント体系全体が置き換えられる「直接的な影響」になっている可能性が高い。したがって、現在の若年層を対象に、間接的な影響にとどまっているのか、直接的な影響が見られるのかを分析することは窪薙（2021）の指摘を検証するうえで重要なリサーチクエスチョンであり、さらに窪薙（2021）にはなかった新たな視点を提供することに繋がる。

4. 論点

本論文では2つの仮説を提示する。まず、前節で指摘したように、窪薙（2021）の結果から、A型語をB型で発音するという「誤答」がより目立つという事実がある。窪薙（2021）ではこのことに言及されていないが、鹿児島市方言が全般的にB型に収束しつつある可能性を示唆する。実際、薩隅方言の周辺地域、特に宮崎県都城市方言は鹿児島市方言におけるB型のみの一型アクセント体系であり、二型から一型への変化は検討してみる価値のある仮説である。よって、本論文ではまず鹿児島市方言の一型化説を提示し、検証する。今後東京方言でのアクセントの下降の有無にかかわらず、本来A型の語であってもB型で発音することを「B型化」とする。

もう1つは、窪薙（2021）のような東京方言のアクセントの間接的な影響を大きく越え、直接影響を受けているという仮説である。この仮説は、現在の若年層に属する筆者の内省と周囲の同年代の話者の観察に基づく。鹿児島市方言の二型アクセントではなく、標準語アクセントと全く同じアクセント型で発音するようになることを「標準語化」として本論文で検討する。

上記の仮説の妥当性をある程度知るために、窪薙（2021）に記載されている初期調査の語彙を用いて、幼少期から18歳まで、あるいは現在まで鹿児島市および周辺の日置市・薩摩川内市で過ごしてきた大学生6名を対象に予備調査を行った。同じ語彙を用いて自身の内省も確認し、計7名のデータを得た。予備調査では、話者に語彙とともに「A: 最後から2番目の音節が高くなる、B: 最後の音節が高くなる」という情報を与えたうえで、AかBかを判断してもらった。窪薙（2021）の調査と同様に算出した誤答率は以下の通りである（表3）。

表3. 予備調査の誤答率 (%)

	起伏式	平板式
A型	21.4	70.0
B型	42.9	32.9

全体として窪瀬（2021）の初期調査より誤答率が大きくなつており、A型平板式語で誤答率が最も高い点は共通していた。しかし、A型とB型のいずれかに当てはめることに違和感を抱く話者も見られた。このことは、窪瀬（2021）が想定していた「誤答」のあり方、すなわちA型語をB型で、B型語をA型で発音するというパターン以外の第3の可能性を示唆する。そしてその第3の可能性は、筆者が主張する標準語アクセントによる「誤答」であった。このことを踏まえ、「B型化」と「標準語化」のいずれかが生じている可能性、あるいは同時に生じている可能性を探り、調査を行っていく。

5. 本調査①

5.1 調査概要

鹿児島市方言話者が発音するアクセントの実態を掴むことを目的として、アクセントの聞き取り調査を実施した。インフォーマントは若年層（21～22歳）7名、高年層（61～83歳）12名の計19名である。鹿児島市以外の土地に住んだことのある話者も数名いるが、全員が鹿児島市で生まれ育ち、人生の大半を過ごしている。なお、高年層話者1名において、他の高年層話者と異なるアクセント型での発音が多数見られたため、結果の算出から除外している。

5.2 調査票

調査票は、A型起伏式・A型平板式・B型起伏式・B型平板式の基本名詞計107語とChatGPT（バージョン GPT-4）により生成した無意味語25語で構成されている。調査票に無意味語を含める意図として、話者に使い慣れていない単語を発音してもらうことで、話者の語彙的知識ではなく一般規則によるアクセント型を推測するというものがある。使用する名詞は窪瀬（2021）の初期調査で用いられた語彙に加え、平山（1960）に記載されている任意の語彙を選択し用いた。標準語アクセントは日本放送協会（1966）も参考にした。以下に調査で使用した語彙を記載する。

① A型起伏式

赤、食べ物、赤貝、岡山、社会、自民、定期、飛行機、玄関、コーラ、ピンク、ガンジス、ロンドン、オレンジ、石、川、嵐、女、サラダ、サイダー、コンセント、バナナ、トロンボ

ーン、フルーツ、チョコレート

② A型平板式

友達、飴、鼻、楓、鎧、笛、日、鹿児島、遠足、乗車、危険、景気、永久、洗濯、擊墜、追試、汚職、対戦、共産、問題、特攻隊、らくだ、ブラジル、オルガン、鈴、風、魚、隣、コソメ、カレー、トンネル、プリント

③ B型起伏式

青、雨、貝、花、空、鯉、鯛、火、家、二枚、飲み物、長崎、生姜、火事、京都、自由、先生、招待、ドーナツ、コーヒー、稻、ふもと、男、光、朝日、カレイ（魚）、緑

④ B型平板式

ねずみ、広島、沖縄、真鯉、お食事、牛肉、手旗、学校、誘拐、公明、洗剤、反対、交代、アメリカ、蒸しパン、蟻、端、あくび、翼、岬、砂漠、イタリア、イギリス

⑤ 無意味語

サラリマク、トロモッシ、フワクチ、メザクール、ポルムナ、キタラフン、ヌズカップ、ハミオス、ヨルンチ、ベグノア、ズリペラ、ラウスティン、クネマトン、オドプシー、シャンメル、ドムランザ、ペジンフィ、スリヨチヨ、ビスピラ、テオルキン、フロシメク、ガントル、ブノザキ、トベリン、ニヨクルマ

インフォーマントには、これらの語彙をそのまま発音したあとに助詞「が」を付けて発音するということを繰り返してもらった。次のような曖昧性を排除することが目的である。例えば、2モーラのA型起伏式語は鹿児島市方言でも東京方言でも「[○]○」と発音される。助詞を付けて発音することで、アクセントの位置が1つ後ろに移動した場合は鹿児島市方言、そうでなければ標準語による発音と判断することが可能となる。

無意味語は、前述したように一般規則によるアクセント型の推測を目的として発音してもらう。木部・橋本（2003）から、鹿児島市方言の二型アクセント体系を用いる話者は基本的にはA型で発音すること、若年層はB型での発音も見られることが予想される。話者が標準語のアクセント体系を用いるならば、McCawley（1978）の外来語アクセント規則より、語末から3モーラ目を含む音節にアクセントを置いた発音が多く見られると予想される。

5.3 調査結果

5.3.1 高年層

高年層における基本名詞アクセントの「誤答率」（非対応率）³を表4に示す。左段はA型とB型のうち伝統的な型で発音できていなかった割合（非）、右上段はそのうち標準語アクセント

³ 窪薙（2021）ではA型・B型のうち伝統的な型で発音されなかった割合を「誤答率」として示していたが、今回実施した調査では二型以外のアクセントも見られたため、今後「非対応率」と称する。

セントで発音した割合 (SJ)、右下段は A 型と B 型を混同して発音した割合 (A↔B) である。以下、調査により算出した割合は全て小数第二位で四捨五入している。また、A 型・B 型・標準語アクセントのいずれにも当てはまらないアクセント型による発音もわずかながら見られたため、右段の合計は必ずしも左段の数値に一致しない。

表 4. 高年層の非対応率 (%)

	起伏式		平板式	
A 型	非: 2.9	SJ: 1.1	非: 7.4	SJ: 2.8
		A↔B: 0.4		A↔B: 3.4
B 型	非: 12.4	SJ: 4.7	非: 15.8	SJ: 4.0
		A↔B: 7.4		A↔B: 11.9

個人差は見られたものの、どの話者も大多数の単語を伝統的なアクセント型で発音できており、全体の非対応率は 9.3% であった。標準語アクセントによる発音は全体の 3.1%、A 型と B 型を混同した発音は 5.5% であった。

無意味語のアクセントは、A 型が 88.7%、B 型が 9.8%、その他が 1.5% という結果となった。A 型による発音が多くを占めたことは木部・橋本 (2003) における記述と一致する。

5.3.2 若年層

若年層における基本名詞アクセントの非対応率を表 5 に示す。表の見方は表 4 と同様である。

表 5. 若年層の非対応率(%)

	起伏式		平板式	
A 型	非: 68.0	SJ: 66.9	非: 96.4	SJ: 76.8
		A↔B: 0.0		A↔B: 19.2
B 型	非: 88.4	SJ: 86.2	非: 67.1	SJ: 64.0
		A↔B: 1.1		A↔B: 1.9

いずれのパターンにおいても非常に高い非対応率となり、全体の非対応率は 80.0% であった。標準語アクセントによる発音は全体の 74.1%、A 型・B 型間での混同は 6.4% となつた。

無意味語のアクセントは、A 型 13.1%、B 型 8.6%、その他 78.3% という結果が出た。その他のほとんどは、語末から 3 モーラ目を含む音節にアクセントの下がり目が置かれる発音であった。つまり、McCawley (1978) にあるような標準語の外来語アクセント規則と一致する。A 型と B 型の割合を考えると高年層よりも B 型が出やすいという点は木部・橋本

(2003) の主張と一致するが、それ以上に標準語アクセントによる発音が多く見られた。

5.4 考察

今回の調査の高年層は、窪薙（2021）の初期調査当時の中年層にあたる。その調査では中年層の誤答率が 7%であったことを考えると、今回の 9.3%という非対応率は自然である。伝統的な鹿児島市方言のアクセント型ではない発音の多くで A 型と B 型の混同が生じていた。無意味語の発音も A 型と B 型による発音がほとんどで、全体を通して標準語アクセントによる発音はほとんど見られなかった。よって、従来の鹿児島市方言アクセントを保持していると言える。

一方で若年層の 80.0%という非対応率は、高年層の 9.3%という割合と比較しても、窪薙（2021）の初期調査における若年層の「誤答率」は 21%であったことを考慮しても、非常に高い割合である。A 型起伏式語と B 型平板式語が他の 2 パターンよりも非対応率が低い点は、窪薙（2021）の初期調査や予備調査と一致する。つまり窪薙（2021）で述べられていた、アクセント型の選択において標準語アクセントに依存するようになる傾向が見られる。しかし、窪薙（2021）の主張と異なる点として、A 型でも B 型でもない標準語アクセントによる発音が目立ったことが挙げられる。非対応率・標準語アクセントの割合とも高年層との差は非常に大きい。無意味語のアクセントが標準語に沿った形が大半を占めていることからも、若年層において標準語化が進行している可能性があると考えられる。窪薙（2021）は、若年層では A 型と B 型の混同が見られるものの二型アクセント体系は崩れていないと主張しており、標準語アクセントによる発音を想定していなかった。したがって、窪薙（2021）の提唱する説を再検討する必要がある。

6. 本調査②

6.1 調査概要

本調査①の若年層話者において伝統的な鹿児島市方言のアクセント型とは異なる発音が多数見られたことから、鹿児島市方言アクセントと標準語アクセントの出現率を確かめるために、若年層を対象として再度アクセントの聞き取り調査を実施した。インフォーマントは少なくとも 18 歳まで鹿児島市で生育した若年層（19～24 歳）17 名である。そのうち現在まで鹿児島市に居住し続けている話者が 5 名、現在は県外に住む話者が 12 名となっている。現在も鹿児島市に居住する話者のうち 4 名は本調査①にも回答した。

6.2 調査票

調査票は、東京方言の起伏式における頭高型・中高型・尾高型及び平板型と、鹿児島市方言の A 型・B 型をそれぞれ対応させた 8 パターンの 3 モーラ 3 音節名詞計 75 語により構成

されている。平山（1960）に記載されている任意の語彙を用いており、標準語アクセントはNHK放送文化研究所（2016）も参考にした。以下、調査で使用した語彙を記載する。

① A型頭高型

意欲、雅楽、かるた、カルテ、喜劇、サラダ、施設、トマト、はたち、バナナ

② B型頭高型

朝日、命、親子、からす、涙、花火、物理、まつげ、緑、もみじ

③ A型中高型

あなた、一部、おもちゃ、垣根、子猫、昨夜、受話器、八時、ふたえ、和菓子

④ B型中高型

雨具、従兄弟、お洒落、おやつ、色素、卵、斜め、花屋、ひとえ、わかめ

⑤ A型尾高型

裂け目、力、昼間、二つ、娘

⑥ B型尾高型

頭、男、表、鏡、言葉、地獄、白髪、光、袋、屋敷

⑦ A型平板型

田舎、鰯、売り場、楓、車、魚、桜、自宅、名前、羊

⑧ B型平板型

あさり、苺、うさぎ、大人、学部、かもめ、きつね、背中、土足、ねずみ

本調査①と同様、インフォーマントには単語をそのまま発音したあとに助詞「が」を付けて発音するということを繰り返してもらった。助詞を付けた際にアクセントの移動が生じるか観察することでA型による発音と中高型による発音を判断し、助詞の前でアクセントが下降するか観察することで尾高型による発音と平板型による発音を区別するという意図がある。

8パターンのうち、③A型中高型のみ鹿児島市方言と東京方言でアクセント型が一致する。また、⑧B型平板型は双方の型においてアクセントの下がり目がないという点で共通している。

6.3 調査結果

アクセントパターンごとの非対応率を表6に示す。表4、5と同様に、左段はA型とB型のうち伝統的な型で発音できていなかった割合（非）、右上段はそのうち標準語アクセントで発音した割合（SJ）、右下段はA型とB型を混同して発音した割合（A↔B）を指す。

表 6.3 モーラ名詞の非対応率(%)

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A 型	非: 84.0	SJ: 82.8	非: 87.1	SJ: 74.7	非: 85.9	SJ: 54.1	非: 90.0	SJ: 82.8
		A↔B: 0.0		A↔B: 3.5		A↔B: 7.1		A↔B: 7.1
B 型	非: 88.2	SJ: 81.2	非: 88.8	SJ: 66.5	非: 84.0	SJ: 51.2	非: 82.1	SJ: 76.3
		A↔B: 7.1		A↔B: 1.8		A↔B: 7.1		A↔B: 0.6

全体の非対応率は 86.2% となり、そのうち標準語アクセントによる発音は 72.3%、A 型と B 型を混同した発音は 4.1% であった。全体を通して鹿児島市方言のアクセントがあまり見られなかつたのは、本調査①と共通していた。しかし、前回よりも多くのインフォーマントに協力していただいたところ非常に大きい個人差が見られ、今回の調査では非対応率が 100% であった話者が 8 名いた。彼らは大半の語を標準語アクセントで発音していた。その一方、ほとんどの語を鹿児島市方言のアクセントで発音する話者も 2 名いた。この 2 名には標準語アクセントによる発音が一切見られず、「誤答」の場合も A 型と B 型を混同した発音であった。

6.4 考察

調査結果から、それぞれのパターンで傾向が見られた。まず、頭高型語は伝統的なアクセント型が現れにくく、「誤答」のほとんどが頭高型で発音された。3 音節の単語でアクセントが語頭に置かれることは鹿児島市方言では見られない現象であり、標準語の影響を強く受けていることが考えられる。また、A 型頭高型語の B 型による発音は一切見られなかつたが、B 型頭高型語の A 型による発音は複数見られた。B 型頭高型語は標準語では下がり目を持つため、アクセントが下降するという点で A 型との類似性が生じ、標準語の影響を受けて A 型で発音されやすいと考えられる。

B 型尾高型語においては、話者によっては平板型での発音が多く見られた。B 型はアクセントの下がり目がない点が標準語の平板型と共通している。B 型の特徴を保持しつつも標準語の影響を受けた結果、平板型で発音されたと推測できる。しかし、助詞を付けずに発音すると「○[○○○]」という形で実現していたという点では、A 型尾高型語・B 型尾高型語とも標準語アクセントによる発音が大半であった。

最後に、平板型語ではやや B 型が現れやすかった。B 型語が伝統的な型を保持していたことに加え、A 型語でも B 型での発音が見られた。これは窪薙（2021）が「アクセントの混同」としていた現象で、下がり目がないという平板型の特徴に合わせて B 型を選択して

いると考えられる。

7. 仮説の検証

ここまで、若年層のアクセントにおける「標準語化」と「B型化」の2つを仮説として調査を行ってきた。以下ではこれらの現象が実際に生じているか検討する。

仮説を検証するにあたり、本調査②で使用した語彙のうち、「垣根（か[き]ね、か[きね]）」「従兄弟（い[と]こ、[い]とこ）」「わかめ（わ[か]め、[わ]かめ）」「頭（あ[たま]、あ[た]ま）」「鏡（か[がみ]、か[が]み）」では標準語でもアクセントのゆれがあり、調査内でもゆれが見られたため、対象から除外して検討する。これらの語彙を除外して再度非対応率を算出すると、次のようになる（表7）。

表7.3 モーラ名詞（ゆれのある単語を除く）の非対応率(%)

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 84.0	SJ: 82.8	非: 85.6	SJ: 81.7	非: 85.9	SJ: 54.1	非: 90.0	SJ: 82.8
	A↔B: 0.0			A↔B: 2.0		A↔B: 7.1		A↔B: 7.1
B型	非: 88.2	SJ: 81.2	非: 89.0	SJ: 77.9	非: 83.8	SJ: 52.9	非: 82.1	SJ: 76.3
	A↔B: 7.1			A↔B: 2.2		A↔B: 3.7		A↔B: 0.6

全体の非対応率は86.1%、標準語アクセントによる発音は75.5%、A型とB型を混同した発音は3.5%であった。

A型頭高型語においてB型による発音が一切見られなかつたのは、アクセントの下がり目を持つというA型と頭高型の共通点に由来すると考えられる。B型尾高型語では尾高型アクセントによる誤答が比較的少なく、代わりに平板型での発音が多く見られた。B型と平板型はアクセントの下がり目を持たない点で共通しているため、標準語の影響を受けた結果平板型で発音されやすいと考えられる。そして、B型平板型語ではA型・B型間での混同が極めて少ない。こちらもアクセントの下がり目がないという共通点から、下がり目を持つA型への変化が生じにくく推測できる。

標準語化が進行している場合、次のような結果が予測される。A型尾高型及び平板型は非対応率が高くなるが、A型頭高型・中高型はA型・B型間の混同が生じにくく、伝統的な型もしくは標準語のアクセント型での発音が見られやすい。B型頭高型及び中高型は高い非

対応率となるが、B型尾高型・平板型はA型・B型間の混同が生じにくく、伝統的な型あるいは標準語のアクセント型での発音が見られやすい。以上の予測は、頭高型と中高型はアクセントの下がり目を持つが、尾高型と平板型は名詞のみで発音すると両方とも「〇[〇〇]」という形で実現しアクセントの下がり目を持たないという標準語の影響を要因とするものである。この予測を表にすると、次のようになる（表8）。

表8. 標準語化が進んでいる場合に予測されるアクセント型の現れ方

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
A型	A: ○ SJ: ◎ A↔B: ×	A: ○ SJ: ◎ A↔B: ×	A: △ SJ: ◎ A↔B: ○	A: △ SJ: ◎ A↔B: ○
B型	B: △ SJ: ◎ A↔B: ○	B: △ SJ: ◎ A↔B: ○	B: ○ SJ: ◎ A↔B: △	B: ○ SJ: ◎ A↔B: △

実際の結果と予測を比較すると、概ね一致している。したがって、標準語アクセントは鹿児島市の若年層のアクセントに直接的な影響を与えていていると言える。予測と一致しなかった点としては、A型尾高型語とB型尾高型語において尾高型アクセントが比較的現れなかつたこと、A型中高型語やB型尾高型語においてA型・B型間の混同がやや見られたことがある。

続いて、B型化が生じている場合、標準語のパターンに関わらずB型語をA型で発音するよりもA型語をB型で発音する割合が高くなると予測される。B型化の有無を検証するため、結果をA型語とB型語に分類して分析する。非対応率とそのうち標準語アクセントによる発音の割合、A型とB型を混同した発音の割合を表9に示す。

表9. A型語とB型語の発音パターンの割合(%)

	非対応率	標準語アクセント	混同アクセント
A型語	86.5	78.2	3.64
B型語	85.7	73.0	3.44

標準語アクセントによる発音もA型語とB型語で大きな差はなく、A型とB型を混同した発音の差もわずか0.2%となった。仮説においてB型一型化の可能性を指摘したが、この結果からはB型化が著しく進んでいるとは言えない。

3.2節では、窪薙（2021）説によるとA型平板式語とB型起伏式語は誤答する可能性が同程度あるにも関わらず、初期調査でA型平板式語の「誤答率」がより高くなっていることに言及していなかった点を問題点として挙げた。起伏式には頭高型・中高型・尾高型の3

種類が含まれる。そのうち尾高型は、前述したように名詞のみで発音すると平板型で実現し、アクセントの下がり目がない。よって、窪薙（2021）の初期調査でも B 型での発音がされやすく、A 型平板式語に比べて B 型起伏式語の「誤答率」が低くなったと推察する。

8. おわりに

本研究では、鹿児島県鹿児島市方言の若年層における名詞アクセントが伝統的な体系からどのように変化しているかを明らかにすることを目的とし、調査を通して高年層との比較や東京方言との比較を行った。2つの調査を通して、二型アクセント体系を保持しつつも型の選択は東京方言のアクセントに依存するようになるという窪薙（2021）の説および「標準語化」と「B 型化」の 2 つの仮説を検証した。本調査①より、A 型と B 型を標準語の起伏式と平板式に合わせて選択する傾向は確かに見られたが、それ以上に標準語と全く同じアクセントで発音される割合が大きかった。この結果を踏まえて本調査②を行ったところ、個人差はあるものの、若年層では従来の二型アクセント体系から離れて標準語アクセントによる発音が普及していることが示された。体系の取り換えが起きるレベルで標準語化が進んでいるのが現実である。標準語化の進行には、鹿児島市方言及び標準語におけるアクセントの下がり目の有無が大きな影響を与えている。B 型一型化は顕著に見られる現象とは言えなかった。

以上のような鹿児島市方言の二型アクセント体系の衰退は世代による変化である。本調査①では 60 代以上の高年層と若年層を比較したが、参考までに中年層にあたる 50 代女性に対して同じ調査を実施したところ、表 10 のような結果となった。

表 10. 本調査①における 50 代女性の結果 (%)

	起伏式		平板式	
A 型	非: 8.0	SJ: 8.0	非 28.1	SJ: 15.6
		A↔B: 0.0		A↔B: 12.5
B 型	非: 14.8	SJ: 7.4	非 8.7	SJ: 0.0
		A↔B: 0.0		A↔B: 8.7

全体の非対応率は 15.9% であり、若年層より低く高年層より高い数値となった。非対応率のうち標準語アクセントによる発音は 8.4%、A 型と B 型を混同した発音は 5.6% であった。こちらも、世代が若くなるにつれて従来の体系による発音が現れにくくなっていることを示唆する。

今後の課題として、主に 2 点挙げられる。まず、調査形式を変えると若年層でも伝統的なアクセント体系の保持が見られる可能性がある点である。本研究における 2 つの調査では、

窟園（2021）の初期調査の方法に則って筆者が作成した単語リストをインフォーマントに読み上げてもらう方式で調査を実施した。しかし、多くの話者から「普段の会話形式であればより訛っているだろう」という声が聞かれた。今回の調査からは若年層において標準語化が進んでいるという結論に至ったが、例文を読んでもらう、自然談話を記録するといった調査を行い発話文中の名詞アクセントを観察することで、従来の鹿児島市方言のアクセント型が現れる頻度は高まると考えられる。

2点目は、鹿児島市方言のアクセント体系全体の変化を捉えきれなかったことである。窟園（2021）の初期調査では、「名詞+が」と発音する句表現や複合名詞についてもアクセント型を検討していた。伝統的な体系には、「複合語句は初頭要素のアクセント型を継承する（窟園 2021: 171）」という複合規則がある。今回は文節を領域としたアクセント付与や複合規則の崩壊に関して調査を行うことができなかつたため、今後の課題としたい。なお、本研究の調査では、2モーラ名詞のアクセント型の判断やA型と中高型、尾高型と平板型の聞き分けを目的として話者に「名詞+が」の発音もしてもらった。筆者の体感では、若年層が「名詞+が」と発音する際のアクセントの移動は決して多くは見られなかつた。関連して、本調査①では、「鯉」という2モーラ1音節語を「こ[い]」と発音する様子も見られるなど、音節がアクセントを担うという鹿児島市方言の特徴さえも標準語の影響で衰退している可能性がある。今後鹿児島市方言のアクセント体系の変化についてさらに研究が深められ、その実態について解像度が高まることに期待したい。

参照文献

- 平山輝男（1951）『九州方言音調の研究：共通語・京阪語との比較考察』，東京：学界之指針社。
- 平山輝男（編）（1960）『全国アクセント辞典』，東京：東京堂出版。
- 平山輝男（編）（1997）『鹿児島県のことば』，東京：明治書院。
- 木部暢子・橋本優美（2003）「鹿児島市方言の外来語の音調」『音声研究』7(3): 92-100。
- 窪菌晴夫（2006）『アクセントの法則』，東京：岩波書店。
- 窪菌晴夫（2021）『一般言語学から見た日本語のプロソディー—鹿児島方言を中心に』，東京：くろしお出版。
- 李香蘭（1992）「日本語における外来語のアクセントの拍数別特徴」『東北大学文学部日本語学科論集』2: 13-24. 東北大学。
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（2012）『日本語アクセント入門』，東京：三省堂。
- McCawley, James D. (1978) What Is a Tone Language? In: Victoria Fromkin(ed.) *Tone: A linguistic survey*, 113-131. New York: Academic Press.
- 日本放送協会（編）（1966）『日本語アクセント辞典』，東京：日本放送出版協会。
- NHK 放送文化研究所（編）（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』，東京：NHK 出版。
- Uwano, Zendo (1999) Classification of Japanese accent systems. In: Shigeki Kaji (ed.) *Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Tonogenesis, typology and related topics*, 151-186. Tokyo: ILCAA.

付録

以下では、本調査①と②におけるインフォーマント一人一人の結果を記載する。

まず、本調査①において個々人の伝統的な鹿児島市方言アクセントで発音されなかった単語数（非）を示す。各項目の右上段が標準語アクセントによる発音の数（SJ）、下段はA型とB型を混同した発音の数（A↔B）である。本調査①の調査票は、A型起伏式25語・A型平板式32語・B型起伏式27語・B型平板式23語の計107語で構成されている。

【高年層：11名】

話者 A

	起伏式		平板式	
A型	非: 1	SJ: 0	非: 1	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 3	SJ: 1	非: 3	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 3

話者 B

	起伏式		平板式	
A型	非: 2	SJ: 2	非: 4	SJ: 2
		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 5	SJ: 3	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 1		A↔B: 0

話者 C

	起伏式		平板式	
A型	非: 1	SJ: 0	非: 1	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 2	SJ: 0	非: 2	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 2

話者 D

	起伏式		平板式	
A 型	非: 1	SJ: 0	非: 0	SJ: 0
		A↔B: 0		A↔B: 0
B 型	非: 4	SJ: 2	非: 3	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 3

話者 E

	起伏式		平板式	
A 型	非: 1	SJ: 1	非: 3	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 2
B 型	非: 3	SJ: 1	非: 2	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 2

話者 F

	起伏式		平板式	
A 型	非: 1	SJ: 0	非: 0	SJ: 0
		A↔B: 1		A↔B: 0
B 型	非: 2	SJ: 0	非: 4	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 4

話者 G

	起伏式		平板式	
A 型	非: 0	SJ: 0	非: 4	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 2
B 型	非: 1	SJ: 0	非: 3	SJ: 0
		A↔B: 1		A↔B: 3

話者 H

	起伏式		平板式	
A 型	非: 0	SJ: 0	非: 1	SJ: 0
		A↔B: 0		A↔B: 0
B 型	非: 3	SJ: 1	非: 3	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 3

話者 I

	起伏式		平板式	
A 型	非: 0	SJ: 0	非: 7	SJ: 2
		A↔B: 0		A↔B: 5
B 型	非: 5	SJ: 2	非: 2	SJ: 0
		A↔B: 3		A↔B: 2

話者 J

	起伏式		平板式	
A 型	非: 0	SJ: 0	非: 3	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 2
B 型	非: 3	SJ: 1	非: 5	SJ: 0
		A↔B: 2		A↔B: 5

話者 K

	起伏式		平板式	
A 型	非: 1	SJ: 0	非: 2	SJ: 1
		A↔B: 0		A↔B: 1
B 型	非: 6	SJ: 3	非: 3	SJ: 0
		A↔B: 3		A↔B: 3

【若年層：7名】

話者 a

	起伏式		平板式	
A 型	非: 12	SJ: 12	非: 31	SJ: 21
		A↔B: 0		A↔B: 10
B 型	非: 20	SJ: 19	非: 13	SJ: 13
		A↔B: 0		A↔B: 0

話者 b

	起伏式		平板式	
A 型	非: 18	SJ: 17	非: 32	SJ: 22
		A↔B: 0		A↔B: 10
B 型	非: 25	SJ: 24	非: 18	SJ: 17
		A↔B: 1		A↔B: 1

話者 c

	起伏式		平板式	
A 型	非: 16	SJ: 16	非: 30	SJ: 29
		A↔B: 0		A↔B: 0
B 型	非: 25	SJ: 25	非: 20	SJ: 19
		A↔B: 0		A↔B: 1

話者 d

	起伏式		平板式	
A 型	非: 17	SJ: 16	非: 32	SJ: 18
		A↔B: 0		A↔B: 14
B 型	非: 24	SJ: 23	非: 9	SJ: 8
		A↔B: 0		A↔B: 0

話者 e

	起伏式		平板式	
A 型	非: 17	SJ: 17	非: 31	SJ: 28
		A↔B: 0		A↔B: 3
B 型	非: 25	SJ: 24	非: 13	SJ: 13
		A↔B: 1		A↔B: 0

話者 f

	起伏式		平板式	
A 型	非: 19	SJ: 19	非: 29	SJ: 24
		A↔B: 0		A↔B: 5
B 型	非: 24	SJ: 24	非: 17	SJ: 15
		A↔B: 0		A↔B: 1

話者 g

	起伏式		平板式	
A 型	非: 20	SJ: 20	非: 31	SJ: 30
		A↔B: 0		A↔B: 1
B 型	非: 24	SJ: 24	非: 18	SJ: 18
		A↔B: 0		A↔B: 0

次に、本調査②において個々人の伝統的な鹿児島市方言アクセントで発音されなかった単語数（非）を示す。各項目の右上段が標準語アクセントによる発音の数（SJ）、下段はA型とB型を混同した発音の数（A↔B）である。本調査①の調査票は、A型尾高型以外が10語ずつ、A型尾高型は5語の計75語で構成されている。標準語における中高型語が語末から2モーラ目にアクセントを置いて発音された際に助詞「が」を付けてもアクセントの位置が移動しなかった場合は標準語アクセント、後ろにずれた場合は鹿児島市方言のA型と見なしている。また、標準語アクセントにおける尾高型と平板型の区別も「名詞+が」の形で発音する際のアクセントにより判断している。読み飛ばしが見られた場合にはその旨を記載している。

話者①

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 9	非: 5 A↔B: 0	SJ: 4	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10
B型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 7	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10

話者②

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 9	非: 5 A↔B: 0	SJ: 5	非: 10 A↔B: 0	SJ: 7
B型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 8	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 6

話者③

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 9	非: 5 A↔B: 0	SJ: 4	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10
B型	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 9	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10	非: 10 A↔B: 0	SJ: 10

話者④

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 5	SJ: 0	非: 10	SJ: 9
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 3		A↔B: 1
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 8	非: 7	SJ: 0	非: 7	SJ: 7
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0

話者⑤

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 5	SJ: 4	非: 4	SJ: 2	非: 3	SJ: 0	非: 10	SJ: 5
		A↔B: 0		A↔B: 1		A↔B: 0		A↔B: 5
B型	非: 5	SJ: 0	非: 8	SJ: 7	非: 9	SJ: 0	非: 7	SJ: 7
		A↔B: 5		A↔B: 0		A↔B: 1		A↔B: 0

話者⑥

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 8	非: 4	SJ: 3	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 8	非: 10	SJ: 8
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 1		A↔B: 0

話者⑦

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 8	非: 5	SJ: 4	非: 10	SJ: 9
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 8	非: 10	SJ: 6	非: 10	SJ: 8
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 0

話者⑧ (A型頭高型で1語読み飛ばし)

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 9	SJ: 9	非: 10	SJ: 9	非: 5	SJ: 4	非: 10	SJ: 7
		A↔B: 0		A↔B: 1		A↔B: 1		A↔B: 3
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 7	非: 6	SJ: 5	非: 6	SJ: 6
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0

話者⑨

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 10	非: 5	SJ: 4	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 3	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 0

話者⑩

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 4	SJ: 3	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 0

話者⑪

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 5	SJ: 5	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 9	非: 8	SJ: 8
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0

話者⑫

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 5	SJ: 4	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0

話者⑬ (B型平板型で1語読み飛ばし)

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 9	非: 5	SJ: 4	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 10	非: 10	SJ: 6	非: 10	SJ: 6	非: 9	SJ: 9
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 0

話者⑭ (B型平板型で1語読み飛ばし)

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 0	SJ: 0	非: 2	SJ: 0	非: 1	SJ: 0	非: 2	SJ: 0
		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 1		A↔B: 2
B型	非: 1	SJ: 0	非: 2	SJ: 0	非: 0	SJ: 0	非: 0	SJ: 0
		A↔B: 1		A↔B: 2		A↔B: 0		A↔B: 0

話者⑮

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 0	SJ: 0	非: 2	SJ: 0	非: 1	SJ: 0	非: 1	SJ: 0
		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 1		A↔B: 1
B型	非: 4	SJ: 0	非: 1	SJ: 0	非: 0	SJ: 0	非: 1	SJ: 0
		A↔B: 4		A↔B: 1		A↔B: 0		A↔B: 1

話者⑯

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 8	非: 5	SJ: 0	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 2	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 1		A↔B: 0		A↔B: 2		A↔B: 0

話者⑰

	頭高型		中高型		尾高型		平板型	
A型	非: 8	SJ: 8	非: 10	SJ: 10	非: 5	SJ: 2	非: 10	SJ: 9
		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0
B型	非: 10	SJ: 9	非: 10	SJ: 7	非: 10	SJ: 2	非: 10	SJ: 10
		A↔B: 1		A↔B: 0		A↔B: 0		A↔B: 0

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

調査におけるインフォーマントの方々は、貴重な時間を割いてご協力いただきました。また、調査協力者を募集していただいた鹿児島市シルバー人材センターの皆様にも大変お世話になりました。幅広い年代の方が調査に協力してくださったおかげで本論文を執筆することができました。

指導教員である下地理則先生は、ご多忙の中調査や執筆に際して手厚いご指導をいただきました。些細な疑問や相談にも丁寧に答えてくださったおかげで着実に研究を進めることができました。上山あゆみ先生、太田真理先生は、講義や演習の授業を通して言語学の基礎をご教授くださいました。また、共に卒業論文の執筆に励んだ言語学・応用言語学研究室の同期や助言してくださった先輩方にも深く感謝いたします。

最後に、私のことをいつも温かく見守り応援してくれた家族に心から感謝申し上げます。

使用したデータの一部（本調査①高年層）の取得に際しては、科研費基盤 A (22H00007) の助成を受けています。